

2007年度は、昨年度同様、薬剤師4名、事務員1名、計5名のスタッフでスタートした。2007年8月、業務量の増加および薬剤師のより専門的な業務へのシフトを目指し、事務員1名増員した。また、下半期には、薬剤師1名の済生会熊本病院とのローテーションを実施。2007年度は、「セーフティマネージメントの強化」を薬局基本方針とし、他部署との関係を強化し、病院全体の安全管理に貢献できるよう努めた。

1. 入院処方箋発行システムの確立

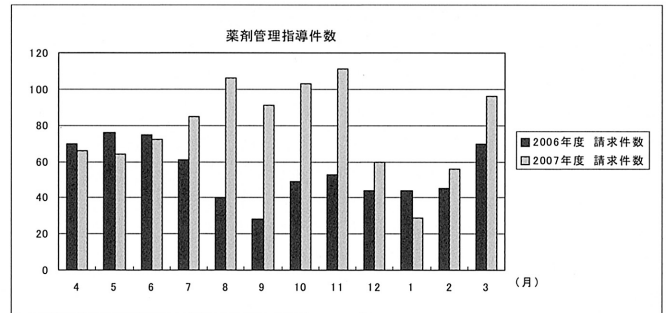
2006年度末、電子カルテ導入までの仕様として低コストのシステムを導入。2007年度、効率的な運用を構築すべく、薬剤師による入院患者の薬歴管理を有効活用し、これまで医師の業務量に大きく依存してきた定期処方箋の発行が、薬剤師によるシステムを利用したサポートにより、比較的タイムリーに処方箋が発行されるようになった。その結果、薬局内での調剤業務の効率化、病棟における看護師の医薬品に係わる業務の効率化、処方内容ラベル発行による医師の重複記録回避等々、多職種の業務効率化に大いに貢献できたと考ええる。また、リスク管理からも、定期処方プレ印刷および処方内ラベル発行を行うことによる規格漏れ防止、医薬品名誤認防止等々、医薬品に関わるインシデントの軽減に寄与できたと考ええる。

2. 医薬品在庫管理システム (SPD : Supply Processing and Distribution) の導入

医薬品の在庫管理は、経営に大きく影響する重要な業務である。そのため、適性在庫維持のために費やす時間は少ない。特に注射の適性在庫を維持するために、注射取り揃え等、注射支給業務のほとんどを薬剤師が行う必要があった。2007年9月SPDの導入、および2007年8月事務員1名増員に伴い、在庫管理に携わる時間の削減とともに、業務の大半を事務員にシフトすることが可能となった。それに伴い、これまで在庫管理に薬剤師が費やしてきた時間を、病棟業務へシフトすることが可能となった。また、在庫金額の低減によるコスト削減にも寄与できたと考ええる。

3. 薬剤師業務の再構築

SPD導入、事務員増員に伴い、兼務には変わらないが病棟薬剤師が病棟業務に専念できる時間をわずかであるが設け、入院患者における医薬品の適正使用推進に努めた。また、NST回診、ICT回診、緩和ケア回診には必ず参画できるよう対応し、薬剤師としてチーム医療に貢献できるよう努めた。このように、ハード、ソフトを駆使して、薬剤師をより専門的な業務に従事できるよう、また、生産性の高い業務シフトが遂行できるよう業務改善を行った。その結果、まだまだ満足できるものではないが、薬剤管理指導件数も前年比約1.4倍に増加した。

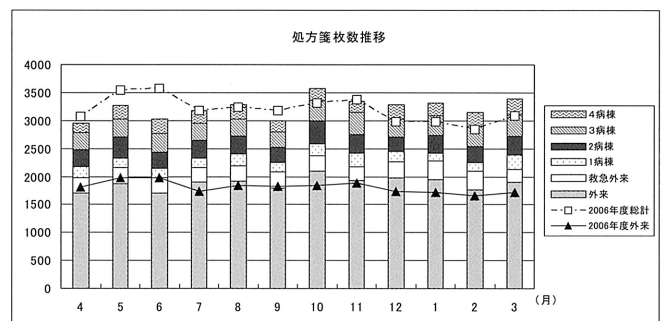


4. 薬局内業務改善

2007年4月、病院機能評価 (Ver.5) の認定を受け、再構築した薬局業務手順書を有効活用し、安全管理を第一に、適宜業務工程を見直しながら医薬品の適正使用に努め、薬局内業務の再構築を行った。

外来調剤に関しては、診察室の増築 (4室→5室) に伴い、外来処方件数も増加し、特に繁忙期となる正午前後の時間帯には、業務優先度を適宜見極め、待ち時間が出来る限り少なくなるよう事務員、薬剤師が連携をとり対応した。特に、外来患者に対しては、薬剤師のみならず事務員からも積極的に声をかけ、状況を適宜説明することにより患者との信頼関係を維持していくことができたと考ええる。

入院調剤については、定期処方発行システムの確立、病棟業務に費やす時間の増加に伴い、これまで規格漏れ、処方内容確認等々、疑義照会を行っていた件数が減少し、リスクの観点からも大いに貢献できたと考ええる。また、日々の薬歴管理による、持ち込み薬の確認や、特に包括病棟・病室においては持ち込み薬の有効利用も推進し医療費削減等々、経営にも少なからず貢献できたと考ええる。



最後に、2008年度は、薬剤師1名の熊本病院への移動に伴い、新たに新卒薬剤師1名を採用し、5年間継続してきた薬剤師の熊本病院とのローテーションに一区切りをつけ、固定された人員での「みすみ病院 薬局」がスタートとする。熊本病院との連携をとりながらも、「みすみカラー」をだせるよう薬局、病院スタッフ一丸となって6年目のみすみ病院を盛り上げていきたい。